
魔力をもたない勇者

泡 照名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔力をもたない勇者

【Nコード】

N3754Y

【作者名】

泡 照名

【あらすじ】

一人の勇者が死に、代わりとして、新しい勇者が選ばれた、が名前の間違いで、選ばれるはずだった者の弟のへたれな学生が勇者に選ばれた。

——異世界トリップした主人公が魔王を倒すというありがちな話です。

始まりの切っ掛けの終わり

広大な平原には、鼻を突く血臭が漂っていた。
普段のこの平原は、青々しい雑草が生い茂っているが、今は見る影もない。

焼け焦げた雑草、地面にあいた大きな穴、そして、夥しい数の屍。その屍の中に立つ、黒い花の模様が刻印された鎧を着た男が一人。

男は右を見る。

屍、屍、屍、屍、屍、屍、屍、屍、屍、屍。

多くの屍で地面が見えない。

男は思わず目を背けた。

男が目を背けた先——そこにも同じような景色が全方位に広がる。

これでは目の背けようが無い。

男は追悼の意を込め、目を閉じた。

アーメン、と心の中で呟き、ゆっくりと——平原の静けさを感じながら——目を開いた。

だが、静まり返った平原の沈黙はすぐに破られた。

「ギヤアアアアアアア——」

不意に響いたのは、耳を劈く様な声。

それは人のものではなく、猛獣のような咆哮。

男は、ベルトにつけた鞘から剣を抜き、身構えた。

男は構えたまま辺りを見回した。

前——いない。

右——いない。

後ろ——いない。

左——いない。

男は、耳と目を疑い、もう一度確認する——やはり何もいない。だが、何も変わらなかったと言えは嘘になる。

男から見て、右斜め前、そこには巨大な影があった。

男は空を見て、顔を顰めた。

空には、翼を持ち、全身を黒い鱗で包んでいる、蒼眼の生物――

ドラゴンと呼ばれる生物が目の前で羽ばたいていた。

全長は、十階建てのビルほど――到底、人間が一人で敵うとは思えない。

「ハハハ……」

男は笑った。

だがその笑いは余裕によるものではなく、諦めによるものだ。

「遺言ぐらい、誰かに聞いておいてほしかったな……」

男はそう呟き、目を瞑った。

ドラゴンは容赦をすること無く、男の頭を食いちぎった。

頭部を亡くした体は、音をたて、倒れ、周りの屍と、見分けがつかなくなった。

平原には、なおも血臭が漂っていた。

1 - 1 招かれざる勇者

いつか、何処^{どこ}かで、誰かが言った。

「疲れたら、空を見ろ」

兼木^{かねき}正大^{まさひろ}という青年は、誰かが言ったその言葉通りに、窓の外の空を眺めていた。

椅子に座り、机に向かい、黒い、学生服らしき服を着ているところから見て取れるように、正大は学生だ。

正大の周りでは、正大と同じ服を着た生徒が三十人ほど——正確に言えば、二十八人——が、黒板と自分のノートを見比べながら、熱心に何かを書いている。

そんな中、正大は何もせず、ただただ空を見ている。

空に、何か変わったものがあるわけでもない。

況^ましてや、正大が空を見ていないといけ^まないわけでもない——ない。だが、正大はノートをとるところか、黒板に目を向けることさえしない。

黒板の前に立つ、眼鏡をかけた白衣の教師も、それを見て見ぬふりをしている。

正大にいくら注意しても、正大は何もしようとしないからだ。

——が、正大は何もしようとしないだけであって、何も考えていないわけではない。

その日その日で違うことを考えている。

今は、昔、祖父に言われた言葉を思い出していた。

「人には、皆、平等に価値がある」

四歳のころだっただろうか、言われた時は意味の分からなかったこの言葉も、歳を重ねていくにつれ、意味が分かるようになってきた。

——意味は分かったのだが、正大はこの言葉が真実とは思えなかった。

もし、この言葉が真実だとするならば、自分の価値を教えてほしい。数々の動物や植物の命を絶^たつて、それを食^{しょく}してまで、自分は生き長らえる価値はあるのだろうか。

自分に食われた命の価値以上に、自分は何かいいいことを出来たのだろうか。

だが、正大は自分に価値が無いと分かってても、死にたくは無かつた。

何故なら、死ぬということは、生きている間に自分の価値を見つけることが出来る可能性を、みすみす捨てる、ということになるからだ。

出来るかもしれない事をやる前から諦めることが正大は嫌だった。故に正大は死にたくなかった。

だが、正大は自ら自分の価値を見つめようとはしない。

もし、自ら努力したとしても、自分の価値を見つけられる可能性が百パーセントになるわけではない。

むしろ、現状より悪化する恐れがある。

ならば、自ら動かない方がよっぽど安全で、安泰で、疲れない。

この考えが偏^{かたよ}っていることは分かっている。

だが、この考えを曲げる気はない。

「いつその事、世界が俺無しじゃ耐えられなくなってくればな」

誰かに向けた訳でも無い言葉を、叶うはずのない願いを、誰にも聞こえない程度の声で空に向け、呟いた。

空には雲一つなかった。

仄暗い部屋には長い机を囲むようにして椅子が並べられている。

その椅子一つ一つに人が座っており、空席は無い。

「皆、存じていると思います。が今回の戦争で約七千五百人が命を落としました」

沈黙を破ったのは十歳程度の銀髪の少女だった。

顔立ちは恐ろしいほど整っており、整髪が生き届いた髪は甘い香りを漂わせる。

だが、この少女以外は大人ばかりだ。

こわもて強面の禿げ頭の男、気の弱そうな金髪の女性、浮うわついた雰囲気を漂わせた長髪の男、顔触れは様々だが、銀髪の少女はどう見ても場違いだ。

机の高さに座高が合っていないのか、正面から見ると唯一見える頭部も机に遮られ、見え隠れしている。

だが、誰もそれを指摘しない。

ゆえ故に、少女は気にせず、口を開く。

「命を落とした者の中には私の父上、母上、兄上もいます。そして

――」

少女は涙目になりながらも、続ける。

「勇者様も、命を落としました」

その発言を切きつ掛かけに場がざわめきだす。

「勇者までもが――」

「魔王の候補が強すぎるのか、勇者が弱すぎるのか――」

せいじふく「静粛に――」

皆がざわめく中で声を荒あららげたのは、銀髪の少女の横にいた眼鏡をかけた女性だ。

髪は黒髪で、瞳の色は、左は緑、右は橙だいだいと、左右で異なる。

だが、その女性も動揺を隠せないのか、頬には汗が流れている。

「なので、次の勇者を選ぶ必要があります」

少女は涙を堪えながら、少し声を張って言った。

「つまり、誰が勇者に適正か――ということだ。皆、意見を述べよ」

黒髪の女性が少女の言葉を補足した。

ふと、机の端にいた長髪の男が手をあげた。

黒髪の女性は『申せ』の意を込め、頷いた。

それを確認して、長髪の男は口を開いた。

「確か、勇者になる条件って魔力を持たないこと、でしたよね」
「そうだ」

返答をしたのは禿げ頭の男だった。

「でしたら、人間などはどうでしょうか？」

「ほう」

長髪の男が言った言葉に、禿げ頭の男が意味あり気に反応した。

そして、黒髪の女性がこう問うた。

「心当たりはあるのか？」

長髪の男は、その質問を待っていた、と言いたげに微笑ほほえんだ。

そして咳きこんで、「失礼」と言い、真面目な表情に戻し、口を開いた。

「人間の世界にはボクシングという殴り合いがあるそうです。

その中のバンタム級という、ボクシングの階級のうち、最重量級の選手たちの王者が兼木尚大かねきただひろという者がいます。

その者はどうでしょう」

長髪の男の言葉を聞き、黒髪の女性が口を開いた。

「その者は強いのだな？」

「はい。少なくとも並の人間以上には強いとされます」

「そうか、なら良い」

黒髪の女性が頷いた。

それを見て、気の弱そうな金髪の女性が

「で、では、こ、これを持ちまして、えっと、き、き、緊急集会は終了です」

たじろぎながら言った。

その言葉を機に、一統が立ち上がり、一斉に銀髪の少女に一礼した。

大人が一斉に少女に礼をしている、と傍はたから見れば珍妙ちんみょうな光景だったが、気にするものは——少なくとも、この場には——いなかった。

チャイムが響き、授業の終わりが告げられた。

正大が大きな欠伸あくびをして顔を上げると、視界にはスカートとブレザーが映った。

「兼木いつ!!!」

高い声で正大の名字を呼んだのは短髪の少女だった。

活発そうな目と、茶色い髪が良く目立つ。

少女の名前は逢瀬美保莉おつせ みほり。

顔はかなり整っていて、元気にあふれているので、男子はもちろん、女子からも人気だ。

「何だ？ 尚大兄たかひろさんのことか？」

気だるそうに正大は返事まさひろ へんじをした。

「あんたのお兄さんは確かにすごいけど、今あたしが言いたいのはそんなことじゃないの」

「じゃあ何だ？」

「あんた、ノートをとって無かったでしょ」

「ああ」

正大の眠たそうな返事によって、少女の怒りのボルテージはあがっていく。

「あんたはそれでもいいの!!!？」

少女は声を張るが、正大は両手で耳を塞ぐ。

「ああ」

「何よ、折角せつかく言っただけなのに、聞く気あるの!？」

少女が顔を真っ赤にして正大に怒鳴り散らす。

また始まった。

正大がそう思ったのはこれが初めてでは無いからだ。

二人の弟を持つ美保莉は、正大の行動を見ているとぐうたらな弟たちと照らし合わせて世話を焼きたくなってくる。

だが、この行動はなぜか正大と自分の弟だけにするものであり、正大と自分の弟以外にはしない。

彼女は苛立ち以外に他の感情も混ざっていることに彼女自身は気付いていない。

尤も、正大にとっては不要であり、むしろ周りの男子から嫉妬の眼で見られるので悪影響なのだが、今ここで「やめてくれ」と言おうものなら、殺されるかもしれないから、極力、口には出さないようにしている。

正大はただただ来る質問に「ああ」で答え、事態の収束を待つだけだった。

「——ってわけ、分かった？」

実は何も聞いていなかったが、ここは「ああ」と二つ返事をした。美保莉は話し疲れたのか息を整えている。

正大は美保莉が息を切らしているのを見て、息を切らすなら何も言わなければいいのに、と思ったが、口にするとまた話が長くなりそうなので心の中に留めておくことにした。

正大は窓の外を見た。

「最近疲れたら窓の外を見るのが癖になってきているな」と小さな声で呟いた。

だが、すぐに正大は目を細めた。

空の色が少し違う、そんな気がしたからだ。

実際に空の色は先程より少し暗くなっているが、不自然なほどではない。

頻繁に空を見ている正大だから気付けたことなのかもしれない。

不意に耳鳴りの様な、高い音が正大の耳を劈く。

正大は恐らくこの音の所為による頭痛に見舞われた。

「ぐ……」

思わずぐもった声が正大の口から洩れた。

「どうしたの、兼木っ!？」

美保莉は心配そうな顔をしているが正大にはそれを見る余裕すらない。

不意に、正大の体がビクンと大きく揺れた。

その後、正大が机に突っ伏したまま動くことは無かった。

石で出来た壁に囲まれた部屋の中には銀髪の少女がいた。

その部屋の唯一の出入り口である木製の扉は僅かに開いていて、そこから眼鏡をかけた黒髪の女性と気の弱そうな金髪の女性が中の様子を覗^{うかが}っていた。

銀髪の少女は青く輝く円の真ん中に両膝をついて、何かに祈るように目を瞑^{つぶ}り両手を合わせて何かを呟^{つぶ}いていた。

「ウロフィ ハラティ カミティ ダグラヴィ ウィクレウィ クロミライティ」

経^{きんじ}の様にも聞こえるが、それとは異なる。

「い、今から発動するのは、異世界と異世界を繋ぐ大規模魔法、『リンク』ですか」

「そうだ」

金髪の女性の質問に、黒髪の女性は無表情な顔で銀髪の少女から目を離さないように答えた。

「で、では、ファイナ様が呟^{つぶ}いているのは、呪文ですか？」

「違う。あれは、『鍵』だ」

「『鍵』ですか？」

金髪の女性は首をかしげた。

「自分の中に眠らせている魔力を自分の体外へ解き放つ『鍵』を言語化したもの、つまり『キーワード』だ。

『リンク』の呪文は他にある」

「つ、つまり、あれは魔力を放出する為の言葉ですか？」

納得がいったような顔で金髪の女性は言った。

「そう。あれがファーンソン家にのみ許された、魔力を貯蓄する力、『魔力貯蓄^{チャージエット}』」

「えっと、でも、発動するには溜めている間、決して魔力を使って

はならないんですね」

「よく知っているじゃないか」

意外だ、と言いたげな顔で黒髪の女性が言った。

「べ、勉強しましたからね」

金髪の女性が微笑^{ほほえ}み、黒髪の女性もつられて微笑んだ。

そして二人はすぐに表情を戻し、再び部屋の中に視線を戻した。

「……コアテリディ ドルガリイ カベライティ」

そこで、銀髪の少女の言葉は止まった。

少しの沈黙が続き、銀髪の少女が閉じていた目を開く。

刹那。

——うごっつ！！

轟音^{ごうおん}と共に暴風とそれに乗せられた石などが部屋をのぞいていた二人を襲う。

「ミリア、閉めろ！」

黒髪の女性は金髪の女性に、扉を指差して言った。

「は、はい！」

返事をして、ミリアと呼ばれた女性は扉を閉じた。

扉はミシミシと軋^{きし}むがそこそ丈夫なようで、壊れる様子は無い。

『リンク・オブ・ゲート』

扉の奥から声が聞こえる。

恐らく、——と言うより確実に——ファイナと呼ばれた銀髪の少女の声だろう。

その言葉を機に扉の軋む音が増す。

扉の隙間からは青白い光が漏れていた。

『リンク』兼木正大』

少女の声が再び聞こえる。

その声を聞いて、黒髪の女性がはっとした顔をして、慌てて扉を叩

いた。

「ファイナ様！兼木正大じゃなくて、兼木尚大です！」

『ええ！？』

扉の隙間から洩れていた光は青白い色から赤白く変わった。

扉は強度の限界に達し、ついには壊れた。

黒髪の女性はミリアを突き飛ばし、女性自身も飛んできた扉を躲した。

光は数秒ほどで収まった。

女性は体を起こし、ミリアに手を貸した。

「う、うう。あ、ありがとうございます、エルナ中尉」

「そんなことを言っている暇があるなら、早く立て」

ミリアは出された手を呻きながら取り、体を起こした。

「さてと、——召喚は成功してしまっているのか？」

「して”しまつて”いる？」

ミリアはエルナと呼ばれた黒髪の女性に問うた。

エルナは呆れ顔で質問に答える。

「ファイナ様が名前を間違えなさつたのだ」

「えっと、——ファイナ様らしいですね」

苦笑して、エルナに返事を返すと、エルナは、ニヤリと人の悪そうな顔をして、

「皮肉だな」

ミリアを茶化すように言った。

「そ、そんなつもりは無いですよ」

ミリアは少し慌てた様子で首を振った。

「まあその話は良しとして、ファイナ様が魔力を使い果たして倒れているだろうから、迎えに行こう」

エルナが部屋に指を差して言った言葉に、ミリアは頷いて、「はい」と返事をした。

二人が中に入ると、部屋の中ではファイナと学生服を着た男がうつ伏せに横たわっていた。

エルナは溜息をつき、

「成功してしまっていたか」

呆れ顔で言って、再び溜息をついた。

「ファイナ様はお前が背負え。」

私はこの者を運ぶ」

エルナは男を転がし仰向けにすると、男の顔を見て、こう言った。

「こんなアホ面づらの奴が——」

エルナは言いかけた言葉を途中で止め、

「まあ、人を見かけで判断するのは駄目みたひだな」

三度溜息をつきながら、頷いた。

1 - 1 招かれざる勇者（後書き）

一応書いておきます。

この物語はフィクションです。

登場する団体・人物などの名称はすべて架空のものです。

1、2 眠り姫（前書き）

なんか、正統派な小説が書きたくて、筆を走らせた（？）結果、出来た小説がこれです。

投稿は不定期ですが、これからも読んでいただければ幸いです。

1 2 眠り姫

正大はふと、目を覚ました。

目を開ける前に感じた感覚は、手を引っ張られ、引きずられる感覚だった。

床は冷たいが、凹凸おうちが無いので、痛みは無い。

聞こえる音は正大を引きずっているであろうものの足音と床と服が摺すれる音だった。

正大はゆっくりと目を開いた。

目の前に映るのは大理石だった。

案の定、引きずられていたようだ。

「——あの——」

正大の言葉に反応し、正大を引きずる者が手を離れた。

正大は立ち上がり、目立った汚れは付いていないが服を手ではいた。た。

そして、引きずっていた者の顔を確認した。

まず見えたのは後ろ姿まだった。

髪は黒髪で、後ろに纏まとめて流している。

正大を引きずっていたものが振り返った。

眼鏡をかけた美しい女性だった。

眼鏡の奥の瞳の色は、左は緑、右は橙だいだいと、左右で異なる。

「お目覚めになりましたか。勇者様」

棒読みを隠す気の無い口調で正大を引きずっていた者が言った。

「勇者？」

正大は思わず心声を漏らした。

「はい。あなたは仮にも勇者様です」

「仮にも？」

「”仮にも”です」

正大は困惑した。

とりあえず、今日起こったことを振り返ってみる。

先程まで教室にいて、逢瀬に色々言われていた。

逢瀬から目をそらし空に目を向ける、空の色が少し違っていた。

そして耳鳴りと頭痛が急激に襲ってきて、それから気を失って――。

目覚めると、引きずられていて、勇者とか言われて――。

――考えないことにしよう、と正大は頭かぶりを振りながら決意した。

「とりあえず、客間にご案内いたします」

女性はさういうと踵かかひを返し、奥へと進んでいった。

正大は、目の前の女性の動きに無駄が無いことから女性が機械の様に見えた。

暫く、その場で立ち止まって見ていたが、女性に置いていかれそうになっているのに気付き、慌てて早足で追いかけた。

しばらく大理石で出来た廊下を歩いたのち、女性に案内された場所はかなり大きな広間だった。

広さも相当のものだが、高さもかなりのものだ。

三十メートル程であろうか、それ程の高さの天井にはステンドグラスがはめ込んであった。

それが太陽に照らされ、何とも言えない美しさを醸かもし出している。

正大は足元を見た。

廊下と同じ大理石がはめ込んであった。

この部屋だけで、どれほどの金がかかっているのだろうか、と正大は思ったが、頭かぶりを振って考えを改めた。

此処は何処だ？

それが今、最優先に考えるべき事だと判断した。

何故、馬鹿みたいに大きな部屋にいるのか――

――きっとこれは夢だ。

だから考えるだけ無駄だ、と考え、強引に納得した。

「では、こちらにお掛けになってお待ち下さい」
女性が手で指し示したのは、如何にも高そうな、焦茶色のソファだった。

そこには銀髪の少女が座って、眠っていた。

黒髪の女性が出て行き、少ししてから、正大は着席し、しばし無言。

——だが、どうも隣の少女が気になる。

静かにと寝息を立てて寝る銀髪の少女を見て、いの一に思ったことは——

『可愛い』ということ、ただ、それだけだった。

正大に特別、愛でる趣味は無い。

——が、この少女の顔はかなり整っており、おそらく百人中、九十人以上が可愛いと言うだろう。

強く抱きしめると折れてしまいそうな華奢な体躯、恐ろしいほど整った顔立ち。その眼の大きさは眼を閉じていても確認出来るほどだった。

高くも低くもない適当な高さにある鼻、そして主張しすぎない仄かに赤い、艶やかな唇。

だが顔が人形の様に整っているので可愛いと言っても、”恋愛対象として”ではなく、”人形のような”可愛らしさだ。

——と、不意に正大の服の裾が握られた。

「す、すいません」

咄嗟に謝り、眼を背ける正大。

謝罪への返事は無かった。

少しの間、沈黙が続く。

正大は、ふと考えた。

俺、何か悪いことしたのだろうか、と。

そして何故、謝ったんだろう、と。

振り返ってみると、銀髪の少女が裾を握っていた。

目は覚ましていないことから見て取れるように裾を握った理由は寝相なのだろう。

「んむ——」

ふと、少女が唸り、寝返りを打ち、正大の肩に寄り添った。

正大は、甘い香りと共に、少女の体温の冷たさを感じた。

銀髪が邪魔で見えにくいのが、頬には涙が伝つたっていた。

「父様、母様、兄様——」

少女の小さな口が小さな声を発した。

誰かを想うような、切なげな声音だった。

「如何して——亡くなってしまったのですか？」

正大は、ハツとした顔で目を伏せた。

少女の親が死んだことを悟ったのだ。

この子の為に何かしてやりたい。

しかし何をしていいのかわからない。

そう考えた、その時——

——うゅんッ！

ドス。

正大が目を伏せる前に正大の眼球があつた高さを通過し、ソファに短剣が突き立てられている。

——しばしの硬直の後、ゆっくりと短剣が飛んできた方向を見る。

金髪で長髪の男が腰に付けたポーチから突き立てられたものと同じ小刀を取りだしていた。

「貴様は誰だ？ 姫に何を——」

口調にも、表情にも、興奮している様子は見られない。

ただ、冷静に標的を排除する狩人ハンターの眼だ。

長髪の男は取り出した短剣を振りかぶる。

「いや、俺は——」

「問答無用」

——うゅんッ！

ドス。

どうやら先程の眼球を射貫く軌道を——当たりはしなかったが——正確に通過させたのは偶然ぐうぜんでは無いようだ。

「話を聞け！」

思わず声を荒らげる正大。

「到頭とうとう、本性を現したな。狂犬め」

正大の問いの答えでは無い返事を返す、長髪の男。

「あんたが言う『姫』があんたのナイフによって傷付くぞ！」

「三流とは違い、姫に当たらない様にお前を狙うなど俺には容易たやすい事」

長髪の男は振りかぶった小刀を投げにかかった。

——その時、長髪の男の頭に軽く手刀しゅとうが落とされた。

「止めなさい、ティオーマ」

ティオーマと呼ばれた男はは振り返り、手刀を落とした者に敬礼をした。

そこに立っていたのは、先程、正大をこの部屋へ案内——引きずっていたのを案内と言うならばだが——した女性だった。

「ですが、エルナ中尉——」

「無礼者、アホ面のこの方は仮にも勇者だぞ。勇者に刃物を向けるとは何と無礼なことか」

アホ面おのと罵ののしったのは無礼じゃないのか？と言いたげな表情でエルナと呼ばれた女性を睨にらんだ。

エルナは正大の視線に気づき、小さく頭を下げた。

「申し遅れました。私はエルナ・カリドナドと申します。

先程、迷惑をおかけしたこの男はティオーマ・クラブド。

そしてあなたが先程お掛けになっていたソファでご就寝なさっている銀髪のお方はこの国の姫君ひめぎみである、ファイナ・ファーンソン様です」

ティオーマは正大を睨みつけながら頭を下げた。

「では、勇者様、こちらへ」

エルナはそう言っ、手で扉を指し示し、踵を返して、指し示した扉へ向かった。

「あの——」

正大が扉に手をかけようとしているエルナに声をかけた。

「何でしょうか？」

「勇者、とは何だ？」

「勇者とは、魔王を倒すために別世界からこの世界に召喚されたものだ」

正大の質問に答えたのはティオーマだった。

「おまえはお前の世界で言う、ロールプレイングゲームをやったことは無いのか？」

「あるけど——」

「そのゲームで言う勇者と同じものだと思えばいいのだよ」

その言葉で、大体は想像できる、が——

「俄かには信じられないな。俺もそこまで馬鹿では無いんだな」

「そうか。だが、残念ながら、ドツキリや夢の類^{たぐい}ではない。それだけだ」

「何か証拠はあるのか？」

それでも正大は疑うのをやめなかった。

「面倒臭い野郎だな。勝手に信じてりゃいいんだよ」

ティオーマは怒気を込めた目で正大を睨んだ。

その頭に再び手刀が落とされた。

ティオーマの後ろにはいつの間にかエルナが立っていた。

「何をしている、ティオーマ。私のペット（ガルドム）の餌になりたいか」

無表情な顔でエルナが言った。

そして正大を見て、こう続けた。

「勇者様、その馬鹿^{ティオーマ}は置いて、早くこちらへ。中将様がお待ちで

す」

正大は、エルナの言葉に従い、エルナの後を追った。

しばしの間、エルナの後を追うと、先刻の部屋と、大きさも、雰囲気も違う部屋の前でエルナの足が止まった。

床や壁の素材は客間や廊下の様な大理石では無く、均等大きさの直方体の石で生成されている。

「こちらでございます」

正大が仄暗い部屋を覗くと――扉が無いので、顔を出すだけで覗くことが出来る――、そこにあつたのは木製の長い机とそれらを囲む、同じく木製の椅子。

そして机の上には燭台しよくだいとそれに立てられた僅かな光を放つ蠟燭ろうそく。

その部屋に窓は無かった。その所為で暗いのかと正大は一人で納得した。

そして一人の男が椅子に座っていた。

僅かな光だが男の顔や服装は認識できる。

ごつごつとした筋肉質な体特徴的だ。

が、それより特徴的なのは厳いつい顔と毛が生えていない――おそらく意図的にした――禿げ頭だ。

「まあ。座ってくれ、勇者様とやら」

この男も勇者と言っている――そこが何より引ひつ掛かかった。

だが返事すること無く、禿げ頭の男に勧すすめられた通とおりに着席した。

「とりあえず自己紹介を。」

大将代理、グラム・グライド・グレズ中将と申す。

よろしく頼もう」

禿げ頭の男は軽く頭を下げて、「次はあなたの番だ」と言った。

「兼木――兼木正大」

グラムと名乗る男が眉をピクリと動かした。

「兼木——『正大』、と申したか？」

とグラムは正大を睨んだ。

正大は今にもクエスチョンマークを浮かべそうな顔で動揺しながら頷いた。

グラムは呆れ顔で溜め息をつき、こう呟いた。

「——姫様か——」

グラムは再びため息をつく、改めて正大の体を見回した。

「——まあ、仮にも兼木正大、お前は勇者様だ。

だから勇者の誓いを立ててもらおうか」

「”勇者の誓い”——？」

「正式に勇者として認めるための誓いだ。

——尤もお前は勇者だから形だけで良いがな」

答えたのはティオーマだった。

「待てよ。俺は勇者になるとは言っていないぞ」

「別にならなくても良いんだぞ」

ティオーマが嘲笑う様な口ぶりと言った。

正大は即答する。

「ならなくていいなら、ならないさ」

刹那、正大の視界からティオーマが消えた。

首筋に冷たい感覚が走った。

正大がティオーマに後ろに回り込まれたと気付いたのはその後だった。

「じゃあ、死ぬ。お前がいると、次の勇者が召喚できないんだ」

首筋に触れていたのは、先程ティオーマが投擲していた短剣だった。その短剣が今はゆっくりと動く。

否、正大の眼に映る物、全てがゆっくり動いているように見えるのであって、小刀だけがゆっくりと動いているわけではない。

これは人間の集中が極限の状態になった時に見る事の出来る光景。だがどうする事も出来ない。

今更、刃を止めようとしても間に合わないだろう。

「くそ——」

正大の眩きも虚^{むな}しく、刃^{やいば}は首筋の肉を引き裂き、鮮血が宙を舞った。

1. 3 勇者の誓い（前書き）

更新が遅くて済みません。

タイトルを変えてしまつて済みません。

そして、くだらなく長い文で済みません。

今回は以前より二〇〇〇文字ほど多く、六〇〇〇文字を超えていまるので、長い文が嫌いな方は済みません。

まあ、二〇〇〇文字多かったせいで更新が遅れた訳ですが……言い訳をして済みません。

謝つてばかりで、済みません。

1 3 勇者の誓い

血が宙を舞い、無機質な床を赤く染めあげる。

正大の体がフラリと揺れる。

――が、正大倒れることはなかった。

地面を踏む力を強め、体の軸を安定させたからだ。

「な――」

ティオーマは口を開けたまま、硬直する。驚きを隠せないでいるようだ。

――正大も同じ様な表情で自分の体の異常を確認するかのように自分の手足を動かしてみる。
稼働に異常性は無かった。

首筋を切られて、血まで噴き出したのに、自分が生きている事が信じられなかったのだろう。

切られたはずの場所に左手をかざす。

そして傷口があるはずの場所に触れた。痛みは無い。

手を目視できる位置に持ってくる。血は微塵も付いていなかった。

――つまり、傷口はふさがっていた。

「ふう」

唯一の出入り口の前から安堵あんどの溜め息が聞こえた。

正大が声のした方向に顔を向けると『ファイナ』や『姫』と呼ばれた銀髪の少女がいた。

少女の横ではエルナが右手の人差し指と中指の二本の指を立て、その腕を正大に向けていた。

「運が良いものですね。勇者様」

エルナが正大を見て言った。

「勇者様を傷つけるな、とファイナ様に言われたもので」

「だけど、どうやって――」

正大は反射的に聞き返していた。

「ティオーマの小刀に回復系魔法を装付しました。

これで斬撃と同時に回復するので傷口は塞がります。痛みを無効化するのは無理の様でした」

エルナは表情を変えずに事実のみを淡々（たんたん）と述べる。

「命拾いしたな。ファイナ様に感謝するんだな。勇者」

ティオーマが笑みを浮かべながら言う。

正大はティオーマを睨んで、齒軋はしりをした。

「さて、もう一度言うぞ。誓いをしてもらおうか」

ぐっ、と正大は顔をしかめ、「誓い」の事について思考を集中させた。

”誓い”というものをすれば、自分がいた世界にいつ戻れるかわからない。

だが、誓いをしなければ殺される。

死にたくない。少なくとも自分の価値を見つけることが出来るまでは。

だが、この世界は自分では無く、自分の兄の方を求めている。

正大は頭かぶりを振って、考えを改める。

楽観的に考えた方がいい、と正大は判断した。

——兄の方を求めているならば、兄よりも求められる存在になればいい。

これは、自分の生きる理由を見つけるチャンスだ。

正大は自分の中の考えを纏まとめ、決意を決めた表情で、口を開いた。

「わかった。誓いとかいうものをすればいいんだな」

「ふむ。では、誓ってもらおうか」

正大は返事の代わりに頷いた。

「では、兼木正大。主ぬしは姫にその身を捧ささげ、お守りすることを誓うか？」

「ああ」

正大は力強く自信に満ちた表情で返事と共に頷く。
グラムがその言葉を聞いて続ける。

「では、主は、姫の婚約者フイアンセとなり、人生の伴侶はんりょとして共に人生を歩むと誓うか？」

「——婚約者？伴侶？それって、結婚するってことだよな」

グラムは答えない。——がこれは強あながち間違っていない、と考えていいだろう。

剣と魔法の世界に召喚されて、顔と名前しか知らない幼い少女と婚約するなんて考えてもいなかった（無論だ）。

自分は良いが、ファイナという少女は良いのだろうか、社会的に大丈夫なのだろうか。

そんな事ばかりに気が行ってしまう。

正大は我に返って、今自分が考えるべき事はそんなことではない、と考え、頭かぶりを振ってグラムを見た。

「断つたら、どうなる？」

「勇者の誓いは成り立たず、我々が主を殺すまでだ。言っておくが、次も助けてもらえると思つたら大間違いだ」

答えたのはティオーマだった。

ティオーマの返答を聞き、正大はわざとらしく顔をしかめた。

「でもファイナは良いのか？好きでも無い男と婚約を結ぶなんて」

「それがファースン家の宿命だ。勇者との間に種を残し、その種がファースン家の次期当主となる」

「俺は、ファイナに聞いているんだ」

グラムはムツと顔をしかめる。

ファイナは怯おびえる小動物のように、エルナの陰に隠れながら頬を赤く染め、答えた。

「大丈夫」と一言だけ。

正大は周りの大人に言わされているのではないかと疑った。

「俺みたいな奴でもか？」

ファイナはうん、と頷き、

「それに、好きでも無いことはない」

と言ったが、言葉が尻すぼみに小さくなって、後半は正大の耳には

届かなかった。

正大は聞きなおそうとしたが、ファイナは真っ赤な顔をして、その顔を隠しながら、部屋を飛び出し、廊下を駆けて行ったので、聞き返す暇がなかった。

咄然としていた正大に不意に声がかけられた。

「で、どうだ？ 兼木正大よ。こっちとしては死んでもらった方が、都合がいいのだが——」

グラムは、口の端を吊り上げ正大を見た。頬には笑みによって出来た皺しわが見えた。

「死んでたまるか。意地でも生きてやる」

正大は迷うことなく言った。

グラムは正大のその眼を見て、満足そうに頷いた。

「いいだろう。兼木正大、そなたを勇者として認めよう」

グラムは、革製のベルトに帯刀たいとうしていた金色こんじきの鞘が特徴的な剣を渡した。

「これは——？」

「勇者として認められた証と思っていただければ」

——不意に後ろから声が聞こえた。

振り返ると、エルナが黒い花の模様エンブレムの刻印された鎧よろいを持って立っていた。

「これもその一種です」

「装備すればいいのか？」

「出陣たんれんや鍛錬たんれんの際に装備していただければ。城にいる際は装備しなくても結構です」

エルナは言葉を予め用意あらかじめしていたかの様に言った。

グラムが持っている剣とエルナが持っている鎧よろいを同時に受け取った。重さは殆どほとんど感じない。

恐らく、重さを無効化キャンセルする魔法をかけているのか、元々の重さが軽い素材を使っているかどちらかだろうが、恐らく後者だ。

「——で、勇者になったら具体的に何をすればいいんだ？」

「詳しいことはミリアにお聞きください」

正大は聞き覚えのない名前に首を傾げた。

——不意に出入口から女性の悲鳴が聞こえた。

悲鳴の直後には鈍い音が聞こえ、出入口から頭を押さえた金髪の女性が壁に凭れ乍ら、室内に入ってきた。

身長は正大より二回りほど小さく、癖の無い金髪は女性には珍しく、肩にギリギリ届く位のショートカットだ。

ファイナと比べれば見劣りするが、それなりに顔も整っている。

金髪の女性は、痛みで涙目になりながらも、正大に頭を下げ、口を開いた。

「ど、どうも。ミリア……ミリア・ロムダルスと申します。ミリアとお呼びください」

正大は心配の感情と共に、この女性がミリアか、と独りで納得していた。

「えっと……、この世界の世界観の事などの説明をしますね。」

少し話が長くなるので別室にご案内します」

ミリアは右手を出入り口に向けて、案内の意思を示す。

ミリアが歩きだすと、正大はその背中を追った。

最初にファイナと会った客間程の大きさは無いが、その客間の半分ほどの大きさの部屋に案内され、今はその部屋の中心付近にポツンと置かれた椅子に座っていた。

「で、では、説明を開始しますね。質問があれば手を挙げてお願いします。」

勇者とは魔王を——あつ、すみません、間違えました。

勇者とは多大な魔力をもつ魔王の『候補』を討伐するために召喚させられた魔力をもたないものです」

正大は、手を挙げ、

「幾つか質問だ」

ミリアに断りを入れ、口を開いた。

「そもそも、魔法とは何だ？」

「ま、魔法とは、聖白龍ホリー・ドラゴンという龍が使っていた火炎を吐く攻撃手段を我々魔法人マジストが応用したものの事を指します。

あ、ある科学者が聖白龍の細胞を調べてみたところ、魔法は私たち魔法人マジスト——貴方あなたの世界でいう人間にも使えることが判明しそれを強化、又は火炎だけでなく、冷却や雷撃、そして回復などの特殊な魔法にまで変化させることを可能とするまで発展したのが今の魔法です」

ミリアは言い終えて、息を整えながら得意気に薄い胸を張った。

正大はというと理解したのかしていないのか、どちらとも取れない中途半端な顔をしていた。

その微妙な表情のまま、正大はミリアに問うた。

「じゃあ、魔王の『候補』って、何だ？」

「ま、魔王の候補を説明するには、魔王のことを知っている必要があるので説明しますね。

ま、魔王は魔法の王という文字通り、大量の魔力をもつ者から選ばれます。

大量の魔力を持っていれば必ず選ばれるというものではありません。王と呼ばれる存在になるのですから、兵を統率したり、作戦を立てたりすることもしなければならぬのでそれなりに知能も必要です。話を元に戻しますが、大量の魔力を持っている者が異世界にいないならば、異世界から連れてくるという場合もありますね。

えっと、魔王にも誓いというものがある、その契りも勇者の様に半強制的ですが、魔王が誓いを交わすと、勇者の場合とは違い、特権が与えられるんですよ

えっと、ちなみに特権を使うと、魔王は魔王では無くなります」

「特権？」

正大は無意識に聞き返していた。

ミリアは頷き、続けた。

「願いを叶えることです」

「勇者になっても特に利点が無いのに、魔王になったら凄い利点があるじゃねえか」

正大の皮肉を、ミリアは苦笑で受け流し、

「えっと、でも、この願いで、魔王自身を死に至らしめる可能性があるのです」

話の脱線を元に戻した。

「どういうことだ？」

先程まで、皮肉を言っていた正大もこの話題には食い付きが良かった。

「どんな願いも叶えるという事は、あり得ない事をあり得る事に変えるという事になります」

まだ理解できない、と言いたげな表情で正大は首をかしげた。

ミリアもそこで説明を止める気は無かった。

「つ、つまり、不死が魔王の願いだとすると、『生物はいつか死ぬ』という、世界の定理を捻じ曲げることになります。

すると、『生物はいつか死ぬ』という定理を捻じ曲げるために他の定理も捻じ曲げられていきます。

えっと、その、連鎖スパイラルが無限に続き、答えに行きつく事が無ければ、全てを削除して、願いそのものを消そうとする働きが起こり、最悪

の場合、この世界が——いえ、勇者様が住んでいた世界も含め、全ての世界が消えてなくなってしまうです」

「つまり、世界を守るために俺は魔王を討伐するのか」

正大はやっと理解出来て心の中のしがらみが消えたようで、満足な顔をしていた。

「えっと、ここで魔王の候補の説明です。」

魔王の候補は前代の魔王の願いによって作られたこの世界の新たな定理、『候補定理』に従って、選ばれた者たちの事を指します。

魔王の候補は原則三人以下で、魔王の候補で、魔王の座を競きそいます。

魔王になるには二つ条件があり、その条件を満たした魔王の候補が魔王になる事が出来ます。

一つは、勇者側の長、つまりファイナ姫を殺すことです。

そして、二つ目、元々は条件は一つだったのですが、『候補定理』によって追加せざるを得なかったが、自分以外の魔王の候補がいな
いということです。

魔王の候補に競わせることが、意味があるのか。

はたまた、前代の魔王の気まぐれなのかは分かりませんが、こつち
にとつては好都合です」

「何故だ？魔王の候補つて大量の魔力を持っているんじゃないのか
？」

正大は言つて、「まあ、魔力というものがどんなものかは知らないが」と独り言ちた。

「魔王の候補が三人いるということは魔王の候補の戦力が大体三分
の一になる”はず”なんですよ

ちなみに勇者側の戦力は二万千十一で、魔王の候補側は四万五千二百十七で、単純に三分の一をすると、一万五千三十九と、数では圧倒している”はず”です。

——が、これは事実とは異なります」

む、と少し唸つて、正大が「どういうことだ？」と問うた。

「どうやら、魔王の候補の三人のうち一人は魔王の候補側の兵を従えておらず、一人で、または魔王の候補側の兵以外の者と組んでいるかのどちらかに当たります」

ミリアの話が終わると同時に、正大は顎に手を当て、少し考える仕草を見せた。

「つまり、その一人で行動している魔王が一番厄介ということだな」

「えっ、何故ですか？」

ミリアは、困惑と驚愕が入り混じったの表情を浮かべて正大に問うた。

正大の頭に今までと状況と（教える側と教わる側が）逆になつて

いるなという考えがよぎり、正大は微笑した。

「残り二人の魔王が手を組んだりしたら、そちらの方が厄介なのではないでしょうか？」

ミリアは正大に問うたが、正大は話の方向性を変えた。

「この世界にも戦に参加していない一般市民もいるのだろう？」

「いますよ。数も勇者側じゆうゆうの兵より圧倒的に多いです、けど——」

どうしてですか？と言いかけたところで正大の声に遮られた。

「もし一人で行動している魔王が一般市民と手を組んでいたとしたら？」

ミリアは何かに気付いた表情で正大を見た。

「こっちは、迂闊うかつに手が出せませんね」

「そう」

ミリアが「成程なるほど」と、呟き、分析しているのを見て見ぬふりをして、正大は続けた。

「それに、魔王の候補同士が手を組むということはまず無い、と考えていいだろ」

ミリアは首を傾げて、

「どうしてですか？」

正大に問うた。

「魔王になるには他の魔王の候補が死んでいなければならないんだろ？」

なら、魔王の候補同士が組むということは魔王の候補自身が自分をいつ殺されるかわからない状況下に置くということになるだろう」

ミリアの心境はミリアの顔を見ただけで見て取れた。

「す、凄もとい分析力ですね」

——元もとい、ミリアは心の中だけでなく声に出した。

正大は得意げになる事無くミリアの表情に微笑した。

「で、説明の続きは？」

「あつ、すいません。つ、次は魔王側の戦術についてです」

「”魔王側”の戦略？」

首を傾げる正大に、ミリアは

「魔法人の脳科学を調べた結果らしいです」

自信が無さそうに返し、話を切り替え、続けた。

「まず、魔王の候補の戦術は大きく分けて、三つに分けられます。

一つは『強襲』。

総員の殆どを攻めに充て、勇者側を攻め滅ぼそうとする作戦です。

主に、魔王側が、万全の状態の時、又は勇者側が戦などで兵の準備が出来ていない時などに使ってくる作戦です。

この時には守りが甘くなっているので、こちらも攻めるか、守りに入るか、どちらかを重点的にすれば対抗できるかと。

ただ、あちらから攻められている時にこちらも攻めるのはリスクが高いとは言えますが」

正大が、解釈に時間をかけているのを他所にミリアは続けた。

「もう一つは『防戦』。

攻めを捨て、守りに専念して、相手側に攻め滅ぼされることを防ぐ策です。

この場合、魔王側は堅固で重量的な装備をしている事が多いので、素早さで翻弄することが出来れば、勝てるかと」

正大は解釈が出来かけていた時に新たな話を言われたので、混乱していた。

ミリアはそれすらにも気付かずに話を続ける。

「そして最後は『威嚇』。

主に強襲と同じで、総員の殆どを攻めに当てるのですが、大きな違いが一つあります。

それはこの作戦をする目的です。

強襲は、勇者側を攻め滅ぼそうとすることが目的ですが、威嚇は魔王側の兵の数を増やすための時間稼ぎが目的です。

だから、威嚇に怯まず、こちらが攻めにかかれれば勝てるのですが、強襲と威嚇は判断がつきにくく、威嚇だと思つて、不用意に攻めにかかる、威嚇に見せかけた強襲、という可能性が出てくるので、

判断を仕兼ねます」

「成程な。これだけ分かっていたらば対抗策も練り易いんだろうな」
正大は、うんうんと頷き、納得した。

「説明は大体はこれで終わりですが、質問があればどうぞ」

ミリアが言つと、正大は「じゃあ」と話の枕詞まくらごころを言つた。

「俺は、その魔法つて言うものをどうやって使うんだ？」

「それは――」

「俺が教える」

ミリアの言葉は、正大の真後ろから聞こえた声によって遮られた。

正大は踵を返しながら距離を取つた。

「本望ではないが、エルナ様に頼まれて、断る事が出来なかったの
でな」

正大の背後を取っていたのはティオーマだった。

「俺が教えるのは個人戦術と武術だ。気を抜いて、死んで仕舞わな
い様に気を付けるんだな」

ティオーマは正大を睨んだ。

正大も負けじと睨み返し、

「誰かさん」に殺されないように頑張るさ」

皮肉を吐いた。

ミリアは火花を散らし睨み合う二人を見て、苦笑し、媒なかつに入った。

1. 3 勇者の誓い（後書き）

ほとんど説明の為の回です。

願い

橙から黒に変わろうとしている空。

逢瀬美保莉は虚ろな表情で、覚束無い足取りで帰路を辿っていた。

「どうして——」

焦点の合わない瞳で空を見上げた。

「どうして、あいつが——」

頭の中を過るのは、やる気のないクラスメイトの——正大の顔だった。

彼は原因不明の心停止で——死んだ。

突然で、不条理な現実が、美保莉に突きつけられた。

美保莉はこの現実を信じる事が出来なかった。

否、信じたくなかった。

あいつは死んでいない、生きている、これは夢だ、と現実から逃げている自分がいる。

同時に、あいつは死んだ、あいつの分も生きなくてはならない、と現実を受け止めている自分もいる。

だけど、願いは一つだけだ。

もう一度生きているあいつに会いたい、触れたい、話したい。

過ぎた願いだと分かっているが、願いが叶うと信じたい。

だから、あいつに生きていて欲しいと、それが叶うことを願う。

『兼木正大に会いたいですか？』

「会えるならね」

だから、誰が言ったのかもわからない言葉に答えてしまったのかも
しれない。

「誰！？」

美保莉は我に返り、声のした後方を睨んだ。

そこでは、輪郭が不安定に揺らめく、黒い影が浮遊していた。

『私なら兼木正大の所に、貴方を連れていくことが可能です』

影は、美保莉の質問には答えなかった。

「それはあの世で、兼木と会わせるといふ事？」

美保莉は疑惑と恐怖が入り混じった瞳で影を睨んだ。

『否。兼木正大は生きています』

「そんなはずは無い！だって、あいつが死んだのを私は目の前で見た！先生も、警察も言っていた！あいつが、死んだ、って！」

声を荒らげ、美保莉は怒鳴る。

影は、少し黙りこみ、

『宇宙の話をしましょう』

強引に話を切り替えた。

「急に何を——」

『実は人間の住む宇宙は宇宙全体からすると、一部に過ぎないので
す』

影は、美保莉の言葉に耳を傾けようとせず、美保莉を押し黙らせるように美保莉の抗議を遮って言った。

『宇宙全体をパン一斤に例えとしましょう。』

宇宙は幾重にも連なっていて、その一つ一つが平行に存在していることから、これを平行宇宙と呼びます。

人間が”異世界”や”パラレルワールド”などというものが平行宇宙の一つです。

つまり、貴方達、人間の住む宇宙は”宇宙”というパンの、ひととき一切れにすぎない、という事です。

貴方達が住む宇宙だけが宇宙という訳ではないという事は分かって頂けたでしょうか？いただ』

美保莉は、影が言う事を固唾を呑んで聞いていた。かたす

『人間が住む宇宙以外の宇宙の一つにこの世界で言う、人間の様な容姿の魔法人間マジンストという、魔法を行使する生物が存在する宇宙があります』

「魔法の存在を認めろっていつの？」

美保莉は影の言葉を遮っていったが、

『魔法が存在しないとするならば、私の影がここに浮遊している事をどう説明しますか？』

この言葉で押し黙らされることになった。

『話の脱線を戻しましょう。』

魔法人間が行使用する魔法の一種に、「リンク」という魔法があります。

「リンク」という魔法は異世界の生物をその者の了承もなくその異世界へ連れて来るとい魔法です』

「つまり、兼木は——」

異世界にいるの？と言いかけたところで、影が

『ご察しの通り、異世界にいます』

美保莉の言いたい事を代弁した。

『そして、私は貴方をその世界に送り届けることが可能です。

私も魔法人間でして、『リンク』を使う事が出来ますので』
暫くの沈黙があった。

美保莉は俯き、腕を組んで考える仕草を見せる。

『兼木正大を救えるのは貴方のみでしょうね』

だが、この言葉が、美保莉の心の揺らぎを無くならせた。

美保莉は顔を挙げた。

何かを決意した顔で、

「分かった。その話を信じてみる」

迷うことなく言った。

何も出来ずに後で後悔するのは、もう二度としたくない。

そんな感情が込められた顔だった。

『では——リンク・オブ・ゲート』

影が言うと、影から青い光が見えた。

美保莉は眩しさに思わず目を閉じる。

『リンク』逢瀬美保莉』

閃光が刹那的にその光力を強め、次の瞬間には光は消えていた。
光が消えたその場に、影の姿は無かった。

そこにあつたのは瞳の輝きを失わせた逢瀬美保莉の亡骸^{なきがら}のみだつた。

2 1 輕快中性大将（前書き）

明日（十二月二十七日）か明後日（十二月二十八日）には次話投稿します。

2 1 輕快中性大将

巨大な丘の上に聳え立つ城には、青々と茂った芝が敷かれた庭があった。

良く手入れされた芝が広がるその庭はどこか草原を思わせる。庭には四つの人影があった。

その内二つは向かい合って、剣を構えあっている。

それとは異なり、残りの二つの人影は椅子に座り、カップの中の湯気を放つ液体——おそらく紅茶——をすすりながら剣を構えあう二人を見ていた。

椅子に座った二人のうち、一人はファイナ、もう一人はエルナだ。

「頑張れ。正大」

銀髪の少女が小さな口を開いて、小さな声で呟いた。

「ファイナ様。そんなにあの勇者がお気に召しましたか？」

ファイナと呼ばれた少女の小さな声を耳聴くみみさと聞いた黒髪の女性は微笑しながら言った。

黒髪の女性の問いに、ファイナは頬を紅潮させながら黙りこんだ。

——だが、ファイナは視線を正大から逸らそうとする事は無かった。「ティオーマが手を抜いているにしても、あの勇者は中々なかなか良い動きをしますね」

黒髪の女性がそう言うと、ファイナの表情が、ぱあっ、と明るくなった。

「エルナもそう思う？間違えて正大を召喚したのは正解だったかも」エルナと呼ばれた女性は、苦笑しながら、「そうですね」と言った（言わなければならない雰囲気だった）。

「でも、あの勇者ならやってくれるかもしれないな」

エルナが、ポツリと独り言ちた。

その言葉を聞きつけたファイナが

「何の話？」

首をかしげながら問うたが、エルナは

「いえ、何でもありません」

曖昧にして答えを出さなかった答えを出さなかった。

風を切る音と共に、切っ先が正大の胴を目掛けて突かれた。

正大はそれを間一髪でかわし、体制を整えた。

だが、短剣ダガーによる突きは、休むことなく正大に向かってくる。
今度は左肩。

正大はそれを剣ではじき、ティオーマの脇腹を目掛け、剣を振った。
正大が振った剣はティオーマの短剣によって簡単に止められ、ティ
オーマは柄えの先を正大の胸に打ち付けた。

打ち所が悪かったのか、正大は呼吸困難こきゅうこんなんになり、荒い息をしている。
正大は呼吸を整える時間を稼ぐために後ろに跳躍した。

——が、正大の目の前には剣があった。

（——ッ！？）

正大は反射的に頭を下げ、それを躲かわした。

正大が躲した剣を突然現れたティオーマが掴つかみ、体制を翻ひるがえし正大の
後頭部に回し蹴りを入れた。

「グッ！？」

くぐもった声が正大の口から洩れた。

正大の声にかすかに動揺の色があったのはティオーマが攻撃してき
た訳が分からなかった故ゆえか。

正大は立膝について、立ち上がるうとしたが、

（立たないと——ッ！？）

ガクッ、とその体が崩れ、正大は地面に突っ伏ふした。

「脳震盪のうしんどうを起こしている。動くな、馬鹿」

暗い視界の中、膝ひざについていた正大に、上から声が掛けられた。

後頭部に鈍痛が走る。指先しか動かない。——確かに、これでは動

かないのが最良の判断だろう。

——しかし何故か、薄らと、だが確実に痛みは引いていつている。意識が正常に戻ってくると、あまり聞こえなかった聴覚も元に戻ってきた。

ブツブツと、ティオーマの声で理解不能な言葉が聞こえてくる。

「……ライ・ファム・リアス」

そこで、ティオーマの声は止んだ。

それと同時に、重かった正大の体は動くようになっていた。

「回復魔法は苦手なんだがな」

恐らく、ティオーマが詠唱していたその言葉は、回復魔法を起動する為の呪文だろう。

正大は、体を引きずらせるように立ち上がる。

——が、ティオーマに足を払われ、今度は仰向けに倒れた。

倒れる際に発生する派手な音がしなかったのは、ティオーマが地面にかけた軟化魔法のおかげだろう。

「寝てると言っているだろうが、馬鹿。貴様に脳は無いのか、勇者」
ティオーマの二つほどの罵倒も脳震盪を起こしている今の正大には返す余裕もない。

「まあよい、立って歩く事が出来るようになったら沐浴でもしておけ」

正大は仰向けのまま、小さく頷いた。

視界の端で、ティオーマが場内に帰って行くのが見えた。

ティオーマを目で追っていると、不意に視界が暗くなった。

正大が目を閉じたから、ではない。

目の辺りが冷たい。

正大は、眼にかぶせられた何かを摘まんで、それを確認する——と
いうか確認するまでもなく、濡れた布だという事は分かっていた。

正大が本当に気になっていたのは、布を掛けたその人物だ。

正大は体を起こし、後ろを確認する。

正大の背後に立っていたのはファイナだった。

ファイナは正大を興味深そうに見つめていた。

手から水滴が落ちているから察するように、布はファイナが掛けたものだ。

「お、……あ、ありがとう」

正大のぎこちない感謝の言葉に、

「う、……うん」

ファイナも、同じくぎこちない返事をした。

そして、両者は沈黙。

しばし、沈黙が続く中、この気まずい空気を断ち切ろうと、正大は口を開いた。

「あのさ——」「あの——」

二人が言ったのは同時だった。

——そして再び無言。

より一層、気まずい空気が漂い始める。

「では、姫、我々も戻るとしましょうか」

不意に掛けられたその声に、ファイナだけでなく、正大もビクツ、と竦み上がった。

ファイナは慌ただしく返事をして、そそくさと、正大の前から去っていった。

しばし啞然としていた、正大は、思考を別の方向に向けていた。

不本意だが自分はファイナと婚約した。

ファイナは確かに可愛い、が自分と釣り合うとは思わないし、ファイナが本当に好きな者と結婚したら、それが最良だと思う。

婚約しなければ俺は殺されるが、ファイナは無事だ。
殺される事の逃げ道に、ファイナとの婚約を選んだ。

——ファイナはどう思っているのだろう。

この婚約について、そして正大自身について。

「なあ——」

後ろから掛けられた声に、正大の思考の中断は余儀なくされた。

正大が振り返ると、軍服で身を包んだ者がいた。

「あんたが勇者かい？」

「は……はあ」

声を掛けてきた者は正大に見覚えのない者だったので正大は微妙な返事を返した。

正大に声をかけたのは”美女”か”美男”か、胸の膨らみを見るまでは（と言っても、胸は並の女性ほどだ）判断しかねない中性的な顔と中性的な格好をした女性だった。

その茶髪は癖が強く、ミリアよりも短い短髪だった事が判断を仕兼ねた理由の一つかもしれない。

「やはりな。見ない顔だったからおそらく——と思ってな」

中性的な容姿のその女性は、正大をじろじろと見回して、

「勇者。あんたの名前は？」

一通り見回した後、正大に問うた。

正大が聞きたかった事を向こうが先に聞いてくれたので、正大にしては都合が良かった。

「兼木正大」

「”正大”か……よし、『マサ』と呼ばう」

「俺のあだ名か？」

正大は女性に問い返し、女性は返事の代わりに頷いてみせた。

「んで、俺は、イル・サイム・ノウズ。一応、ここの大將をやつてる。イルって呼んでもらえると嬉しいかな？」

「わかっ——」

正大は納得しかけて、驚愕の表情を浮かべ、イルと名乗る女性を二度見した。

「大將？」

「おう。一応、戦略部隊のトップだ。敬えよ」

イルは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

正大は信じられない、と言いたげな表情でイルを見つめる。

「どうした？そんなに見つめられると恥ずかしいのだが」

顔を横に向ける仕草と台詞だけは羞恥の心を示していたが、顔と声

音で、これが演技だという事を見抜けないほど、正大は馬鹿——と
いうより鈍感——では無かった。

正大は呆れ顔をした後、ふと何かを思い出したようにイルに問うた。
「話は変わるが——」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3754y/>

魔力をもたない勇者

2011年12月26日21時56分発行